

浄土

1985-10

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 連載名（特別授承認雑誌）第三二五号
昭和六十年九月二十五日印刷 昭和六十年十月一日発行
第五十一卷 十月号



乙丑長

うん。

小林





十月の秀句

秋高き天文台のともしかな

正岡 子規

わが秋思水わたりきし一羽鳩

中村 草田男

味すぐるなまり豆腐や秋の風

久保田万太郎

十月号



——の光明遍く十方世界を照して、念
仏の衆生を摂取して捨てたまわず。

——『観無量寿経』真身観文

目次

法話

- 地方身辺雑記……………旭 俊 正……(2)
お十夜散歩(一)……………坂 野 泰 巨……(6)

<連載> 一紙小消息 ③

- 罪人も念仏で往生できる……………村 瀬 秀 雄……(12)

み仏とともに = 7 =

- 小僧生活の再出発——……………安 居 香 山 ……(18)

<ナムナム童話> (3)

- ナムナムさんのがみ……………ぬのむらてつや……(23)

河西回廊の秋

- 「五大石窟の旅」旅日記(六)……………木 下 隆 一……(29)

◇◇長篇連載小説◇◇

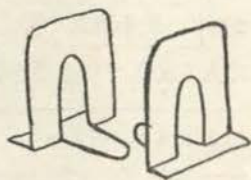
- 立ち止まるな善導 第16回……………寺 内 大 吉……(35)
英才の秘密

挿絵 松濤 達文

表紙 小林治郎 画

カット 大正大学美術部

地方身辺雜記



旭 あさひ
俊正 しゅんしょう

(江津市西晩寺住職)

四季の風土を彩る、大自然の営みの中から我が国独特の風情が生れ、人間生活と宗教信仰が現われる。お十夜法要はこの国の風土に根付いた、浄土教信仰の主要な行事であります。

法会の説教には必ず、その由来を話すことと聞いているので、常参特信の皆様にはよく御承知のことと思いますが、お十夜の言葉の由来から始めさせていただきます。

無量寿経に「此に於て善を修すること十日十夜すれば、他方諸仏の国土に於て善を為すこと千歳するに勝れたり」、この経文の中より十夜の名称は起因していますが、行としての諸々の善行は現今にては却々行ずることが困難でありますし、此に謂われますところの善は、畢竟、きつじ浄善にて、その最高の価値としての善は、念仏申すこと、の一語に尽きることであります。よく現代は価値観の多様化の時代と謂われておりますが、浄土教徒にとって念仏申すことこそ最高の価値であり、人生究竟の所為であると至言されることでありまして、その修鍊の為のお十夜法要こそ、まことに有難い念仏信者の集会といえましょう。

浄土宗にては宗祖の御忌会、盆施餓鬼会、と共に十夜法会とは三忌忌として全国の浄土宗寺院にて厳修されますが、特に十夜法会には私共自身の信仰増進の爲の法会と受取って行くことが肝腎で、いつも唯、寺の法要には祖靈の追善廻向してもらうだけで、事足りるという旧来の慣習がありますが、追善廻向も結構ですが、少々は法会のあり方も考え直して、浄土教徒としての内省、宗祖法然上人のみ教を体して、現代に生きる自分自身の救いを求め、より念仏者としての自覚と向上を求めるべきであると思います。

さて十月に入り、時は佳し、私の所属する石見教区の浄青の諸師が百万遍の別時念仏の修行を発企し、この十二日より三十一日迄の二十間に、教区内の二十ヶ寺を巡って、一日五万遍の別時念仏をやるうというのです。

別時のことについては、法然上人も念仏策励の為に特別に時を設けて、真剣に念仏を申しなさい、と別時念仏をお勧めになっておられます。浄青の趣意書は左記の通りです。

浄土宗石見教区青年会では、郷土石見で御誕生された記主良忠上人の七百回遠忌と迎えるにあたり、このよき縁をかみしめ、報恩の気持ちを表すために何か出来ることはないかと話し合いました結果、左記日程の通り、百万遍のお念仏をお称えすることを決意いたしました。

お念仏はご存じの通り浄土宗の教えの要かなめであります、特に百万遍のお念仏は、功德が大きいと古来より伝えられております。ひとつの木魚でのお念仏が百万遍になるようにお称えしますので一緒にお称えなさる方のお念仏を合計すれば、一千万遍、二千万遍にもなることでしょう。とにかく私共も、皆さんも一緒にうちそろってお念仏に励もうというわけです。

一日一寺院で五万遍のお念仏を申しそれを二十日間に亘り、二十ヶ寺を回って合計百万遍のお念仏を達成する予定です。

日五万遍のお念仏と申しますと、朝六時から始めましても、夜八時頃まではかかると思われます。それを二十日も続けるわけですから大変な行事ですが、決意を堅くして頑張りたいと思います。皆様方におかれまし

でも時間の許す限りご参加下さり、一緒にお念仏を称えていただきますようお願い致します。

現在の多忙な日々にあつて、共にお念仏を申し、仏様に心を通わせる一時を持つことは大変貴重な事と思います。どうぞ、この浄土宗青年会の趣旨をご理解下さいまして、ご協力、ご参加下さいますようお願い申しあげます。合掌

以上長文になりましたが、ご紹介まで頓首。

この石見浄青は昨年は印度、今年六月には中国と仏跡参拝を果し、此度は不退転の決意を以て百万遍念仏行を遂行中であります。

さて私事になりますが、この六月に上記の浄青の方達に導かれて、私も中国仏跡参拝団に同行して参りました。西安を訪れては古の唐の都をしのび、善導大師ゆかりの香積寺に参拝し、塔にも上らせていただき、十日間の旅程を了えて帰りました。が昨年来両眼の視力が著しく衰えて、旅行中もいろいろと不便を感じ、困ることが度々でしたので、思い切つて入院手術を決心し、順番を待つて七月に、二週間の入院をして、白内障の手術をしていただきました。経過は良好で八月益も無事勤めさせていただきましたが、この入院中のこと等について話をさせていただきます。

現代の医療の進歩は白内障の手術など平常の事として施療され、回生の喜びを得られることを体験し、大へん有難く思っております。と申しましたが、人間一番大切な眼球のことです、手術前は大へん緊張いたしました。

この病院は鈴木眼科と言ひ、私の住む地方の小都市にあります、毎日外来の患者は三百人ばかり、入院治療の人は十人程で、院長先生は未だ三十歳の女医さんでして、県下私設の眼科では最高の機能を備えた病院だそうです。これが、自分の寺より一軒も離れていない所で手術の出来る時代になったことを有難く思いました。

一日程は体調を整えるため事前の処置があり、二日目の午後、呼び出されて手術室に入りました。「お願いいたします」と小声で会釈して、手術台上に上りましたが、手術される院長はじめ六・七人の看護婦さんの物々し

い白装束、頭巾、マスク姿に圧倒される感じでした。自分で意識せずとも、自然と念仏が、無言のうちに腹中よりこみ上げて来ます。聞きます処、この手術は眼球より核膜を引き抜いて、その代りに特殊レンズを嵌込むのだそうです。手術は注射で痛みは感じないと聞いておりますものの、眼球の手術とあっては、相当の勇氣と決断の要ることでした。そこで私は外部に聞こえないお念仏のうちに、古徳上人の訓えを思い泛べ、こうした時には、心は如來に、手術は全部お任せ、只この症病のための実験台になるのだ、手術の成功、不成功は時の成り行き、それでいいんだ、と自分に云い聞かせ、その間約三十分、手術は片眼だけでしたが、両眼に繃帯された私は担架で運ばれ、個室のベッドに寝かされたことでした。

手術後三日目の午後、始めて手術した方の目の繃帯をとって貰った時、その異様な明るさ、白銀の世界が展開した驚嘆と歓喜、手術は成功したと院長先生より言われ、何か新しい世界に出た様な感激を覚えました。入信後の如來の光明も斯くやあらんとお念仏しました。老眼鏡をかけても新聞を読むのに苦勞した今まででしたが、眼鏡無しで新聞が読まれ、病室より窓越しに街路を往来する人の顔がはっきりと見える。これから退院の日まで静かに読書の余暇を与えられたことも有難い次第でした。

何分、眼科ですから、入院患者は手術さえ済めば身体の方は通常なので、入院者仲間の交流が始まります。私も初めての入院にて貴重な体験をさせていただき、入院同士の御縁も出来ましたので、その際の対人関係のお話を二件ばかりさせていただきます。

私より一日先に入院して居られた隣室の方がノックして入って来られました。この方は私が浄土宗の寺の住職と聞いて、初対面とは云え心安げな態度で話されますのに、日市のナマコン会社の役員で年齢五十歳代、体格の好い三谷さんという方でして、先づ自分は浄土宗の家に生れ、次男坊で養子に行った先も浄土宗で、毎月お寺より月参りに来ていただいて居りますと語り出され、丁度好い機会でお聞きしたいことが沢山ありますが、二・三問よろしゅうございますか、と私もどうぞと御返答した次第でしたが、さて以下は次第にて……。

(つづく)

お十夜散歩(一)



ハ エーヘー
マーハー
アーヘー
オーホー

京都真如堂の本堂から、鉦講かねこうの大きなかけ

坂さかの
野の
泰たい
巨ぎょ

(茅ヶ崎市西運寺住職)

声がきこえてきました。

十一月十五日は、真如堂のお十夜の結願法要です。

私は一昨年、お十夜の発祥の地として知られるこの真如堂のお十夜におまいりさせていただきました。(たまたま、前日でかけたところ、十一月五日に開白し、十五日の結願までの間は法

要がないとききました。）

この寺は真如堂の名で親しまれていますが、正しくは鈴声山真正極楽寺といい、真如堂とはその中心の大本堂をさしているのです。

真如堂のご本尊は阿弥陀如来の立像で、約一メートルの寄木造りで慈覚大師（円仁）の作と言われています。昔から三国無双の阿弥陀如来と称され、日本三如来（善光寺如来、釈迦堂如来、真如堂如来）の一つに数えられています。

真如堂縁起によりますと、この阿弥陀如来はもともと比叡山常行堂の本尊とするために作ったのですが、阿弥陀如来はそのことに頭を横に三度ふったので、慈覚大師が「それでは山を下って都へ行き、一切の人々を救済してください。中でも罪ぶかい女性をお救いください」とのべると、三度うなずかれた、と記されています。

そのようなことから、真如堂の阿弥陀如来は一千年前の開創以来、特に多くの女性に拝

まれてきた仏さまであります。



今、お十夜といえますと、一般的には浄土宗でおつとめする法要であることは、どなたもごぞんじであります。しかし、そのお十夜の起源はこの真如堂（天台宗）であります。

そもそも浄土宗でこの法要を修するようになったのは、明応四年（一四九五）、鎌倉光明寺の観誓祐崇上人が、勅命により宮中で十夜法要を修せられたことによります。

そのときの後土御門天皇のありがたい仰せが、「聞くならく、真如堂の例時の行法、十夜法要、引声弥陀経および引声念仏は、最も殊勝の法なりと言う。願わくば宮中においてその法を営めよ」とのことでした。

そこで観誓上人は、宮中へ真如堂の僧衆を率いてその儀式を執行了しました。

引声弥陀経および引声念仏は、慈覚大師が

唐よりもちかえったもので、曲調を付して阿弥陀経を誦誦し、曲調を付して念仏を称揚する法を伝えたものであります。

観音上人は、これらのすべてが慈覚大師の伝えたものであること、さらには「真如堂の本尊の靈驗より事おこりて、近來十日十夜の法事を執行す。これひとえに來世の念仏のみとどむとの仏の仰せあらたなるいわれなり」とのべ、もし許されるならば、この法要を光明寺に移したいとの願望をお伝えしましたところ、「引声の誦經念仏、ならびに十夜の法事、永く浄土宗の法軌たるべき旨」の勅許が下されたのであります。これによって、お十夜は浄土宗の専行のようになり、今日では全国各地で修せられるようになったのであります。



これらのことから、浄土宗のお十夜の起

源は、単に無量寿經の「ここにおいて善を修すること十日十夜なれば、他方諸仏国土において善をなすこと千歳するに勝れたり」を根拠として、浄土宗独自で始まったものではないことがわかります。

ところで、よく問われることですが、真如堂の縁起をご承知の観音上人が、真如堂に無断で十夜法要のお許しを願ったのでありましょうか。

特に、「真如堂の本尊の靈驗により事おこりて」真如堂のお十夜が始まっていることを承知していたわけですから、前もって十夜法要を移すことについて、真如堂との了解ができていたのかもしれませんが。

真如堂縁起によりますと、法然上人も真如堂を念仏道場としてたびたび参堂されたようであります。

また、法然上人から熊谷入道への書状の返事写載がありますが、その文中に法然上人が「真如堂の如来よりさすけたまい候歌」として、

ただ頼め よろずの罪は深くとも

わが本願の あらんかぎりは

の歌を、熊谷入道に送っています。

また縁起には「法然上人第三回の追善が当

伽藍（真如堂）において、安居院（聖賢）法印、

道俗をあつめて七ヶ日百万遍の念仏を勤修し

……」とあります。

真如堂の阿弥陀如来と法然上人、阿弥陀如来の第三十五願（女人往生の願）と法然上人の女人往生思想などを考えても、真如堂との関係は見逃がせないと思います。

真如堂は天台宗でありながら、浄土宗とはゆかりが深く、浄土宗の念仏の原初道場としての性格をもった寺であったことが察せられます。それらの経過をみても、十夜法要が光明寺へ移ることについての問題はなかったものと思うのです。

さて、お十夜法要の起源といわれている「真如堂本尊の靈験」というのは、お十夜が浄土宗の永式となった時より六十有余年前のできごとであります。

さて、「真如堂縁起」中巻には――、室町時代、永享のころ（一四二九―一四四〇）、阿弥陀如来を深く信仰していた伊勢守貞経の舎弟貞国（法名真蓮）は、世の無常を深く感じ真如堂において三日三夜の念仏を修せられました。そして、明け方には剃髪出家する覚悟をしていましたところ、夜ふけの夢中に、一人の僧があらわれました。

「汝が現世後生ともに、我を頼むところざし全く偽りなし。来世は超世の願に任せて、今世のことは今三日待つべし」と告げ、詠歌をもつて、

心だにたてし誓いにかないなば
世のいとなみは とにもかくにも

との夢告に、貞国は通世を思いとどまったのです。翌日、舎兄の貞経は上意にそむき、都

を忍んで吉野の奥に蟄居してしまい、舎弟の貞国が家督相続を申し渡されました。そこで貞国は、先の三日三夜につづき、さらに七日七夜の別時念仏を修して、阿弥陀如来に報謝のまことをささげられました。

これが合わせて十日十夜になるところから、世に真如堂の十日十夜法要（お十夜）ということになったのです。

舎兄の貞経は、將軍足利義教公（元青蓮院門跡）の政所執事職であり、舎弟の貞国も家督相続とともに執事職を引きつぎました。

貞経から貞国への家督相続のこと、貞国の無常観など、今日その内在している問題が、いま一つ理解しにくいのです。

室町時代はあらゆる分野において、秩序の大混乱時代であります。特に南北朝のころより、武家の相続形態が変化し、分割相続から単独相続になり、嫡子が誰れになるかが一族の浮沈につながる重大事のため、家督相続問題での争いが絶えなかったのであります。

貞経と貞国の場合も、これと同様の事件であつたかと思われまふ。

このように貞国の得たご利益のことを「現当二世の利益」といい、称名念仏によって来世はもとより現世においてもご利益をいただくということでもあります。そして、本来往生のために念仏したことが、思いがけずもそのまま現世のよろこびとなるごとく、求めずして得るご利益を不求自得の利益というのであります。



真如堂の山内、まさに紅葉となって、結願法要が盛大におこなわれています。

肩衣を身につけた鉦講の古式豊かに鳴らす鉦板（双鑿）の音のなかを、一山の僧侶、詠歌講、稚児がお練りをして堂内に入ってきました。本堂は十五間四面、総樺造りで、本堂内부는前方に畳敷きの広い外陣、内陣、そして

内々陣があります。信徒は十日間開扉されていた阿弥陀如来を内々陣にて拝むことが出来るのです。

法要は莊嚴のうちに、導師の発声する切り十念が外陣の三方向にて三回おこなわれ、またお練りが鉦講に送られて退堂して行きました。

境内のテントでは、「お十夜粥」といって、婦人会の人たちがつくって売っています。小豆入りのお粥だそうです。茶わんつきで〇〇円です。昔はご本尊に供えられた小豆ご飯のお下りを、お粥にして食べると中風にならないとか、タレコ止めのまじらないと言われたその名残りでありましょう。今日流行のボックリ寺の元祖といったところです。

真如堂の裏手に紫雲石というのがあります。法然上人が真如堂での念仏行の帰途、一休みした石だとのいわれがあります。

(それではこの辺で一休みしましょう!! つづく)

長田芳一画 五雨みなこ文

絵本 ほうねんさま

B 6変型判/定価三〇〇円

右近れい子画 福嶋智誉編

絵本 おじぞうさま

B 6判/七二頁/定価四〇〇円

◎ 仏教まんが・教育図書

— 多数発行 —

大 道 社

〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

電話(〇三)二六二―五九四四

振替(東京) 一―八三四七

一紙小消息

③

罪人も念仏で往生できる

「罪人なりとても疑べからず。罪根ふかきをもきらはじとの給へり」

罪人というのは十悪を犯した悪人のことである。身行には殺生、盗み、邪淫の三悪があり、言葉の上では偽り、ざれごと、悪口、二枚舌の四悪があり、心の上では貪欲、怒り、愚痴の三悪がある。十悪のうちで四つまでが言葉の上の悪であるということは、昔から今

村瀬秀雄

に至るまで言葉の悪が最も恐ろしいとして戒しめてきたからである。そして問題の多いのは殺生である。同じ殺生であっても、殺す相手によって罪に軽重があることが論ぜられてきた。このことは正法念処經に詳しく殺生を区分して、無罪から極刑までがあるとされている。ある時法然上人の弟子たちが来世の往生について話し合っていた。一人が往生は魚を食べない者こそ往生できるといった。する



と他の一人が魚を食べる者の方が往生できる
といい出した。こうして魚を食べるか、食べ
ないかについて論じ合っていた。側で弟子た
ちの話を聞いていた上人はいった。

「魚を食べる者の方が往生できるというなら
ば、鵜こそ第一に往生できるであろう。魚を
食べない者の方が往生できるというならば、
猿こそ第一に往生できるであろう。往生は魚
を食べたからできるものでないし、食べない
からできるというものでない。ただ念仏を唱
える者だけが往生できるということを、源空
は知っているだけである」(諸人勸化の御詞。
勸修御伝第二十一)

観無量寿経の下品上生は十惡を犯した凡夫
の往生である。この者は臨終に仏法を説く善
友にあり、大乘經典の經題をほめたたえる教
えを受けた。善友は更に教えて合掌させ、南
無阿彌陀仏と唱えさせた。この者は念仏の功
徳によって、すべての生死の罪が除かれた。
阿彌陀仏は化仏、化觀音菩薩、化勢至菩薩を

遣わし給い、その者の前に到らしめた。化仏
たちはその者を褒めていい給うた。

「善男子よ、汝は念仏を唱えたことによって
諸罪が消滅した。そこでわれわれはここに來
て、汝を迎えとるのである」

化仏たちが念仏の功德だけを選んで褒め給
うたことについて、善導大師は次のように説
いている。

「この愚人は十惡を行って恥じない位であつ
たから惡業の報いの障りが多く、その上に臨
終の死苦が加つて一層激しい苦難に攻められ
ていた。このような時に善友が經典の首題の
功德を説き聞かせたのであるが、苦悶する者
にとつては容易に耳に入らなかつた。心が散
乱していて教えを受けても、十分に理解でき
なかつた。次いで善友は念仏を唱えさせたが、
さすがの愚人も容易に心に留めて念仏するこ
とができた。僅か一声にすぎなかつたが、心
が散乱せずに専心に念仏を唱えることができ
たために、經題の功德を聞いた時より遙かに

大きな功德が得られ、限りなく遠い過去にさかのぼっての罪業が除かれたのである」(観經散善義)

そればかりでなく一声の念仏の中には心願と身行とが混融しているとして、大師は次のように説いている。

「極楽浄土は不可思議世界であって最高の快樂があることを知り、往生したいと願う心を起したにしても、念仏を唱えるという身行がなければ往生できるわけがない。心願だけがあっても往生できないからである。観經には重罪を犯した者が極楽浄土に往生できたと説かれているが、臨終に善友に勧められて十声の念仏を唱えることができたからである。愚人が何故往生できたかといえ、十声の念仏に十の心願と十の身行が兼ね具わっているからである。南無は歸命するという意味であるから、南無と唱えることによって極楽浄土に往生したいと願い、同時に善根功德を往生するために指向することになる。仏力によって

罪を滅し、往生せしめ給うと願う言葉が南無である。阿彌陀仏と唱えることは身行である。南無阿彌陀仏と口に唱えれば、その中に心願と身行とが兼ね具わっていることになる」(同上)

たとえ一声の念仏でも心願と身行とが兼ね具っているのだ、その他に何等かの修行による功德を積んでも積まなくても極楽往生ができる。大師は念仏を唱える者はすべて往生できるが、それには四つの勝因があるとして、次のように説いている。

「念仏を念々に相続して唱え、生涯を通してやめなかったならば、その者は十人が十人ながら、百人が百人ながらすべて極楽浄土に往生することができる。何故なら念仏に次のような四つの勝れた因縁があり、念仏を唱えればそれだけの利益が得られるからである。一には念仏は煩惱や悪業に妨げられず、心を乱すことなく、疑いなく深く信じて常に純一に唱え続けられることである。二には念仏は阿

弥陀仏の本願に合致した行であるということである。三には念仏は釈尊が永遠に留めおき給うた行であり、経道が滅尽しても求遠に弘通される行であるからである。因には念仏は諸仏が口を揃えて真実の教えであると証言し給うた行であることである」(往生礼讃偈)

更に大師は念仏を唱えれば、利剣が物を断つように煩惱の罪障を断ち切って、罪が除かれるとして、次のように説いている。

「釈尊ご一代の説法は不同にして八万四千の法門に分れているが、何れも愚かさや迷いをなくし、悪行の報いの苦しみを減するための教えである。その中にある利剣が物をよく断つように、すべての煩惱による罪障を断ちけることができるのは阿弥陀仏という名号である。一声の念仏を唱えれば、すべての罪を除くことができる」(般舟讃)

罪を悔い改めて許しを請うためには、念仏を唱えるのがよいとして、大師は次のように説いている。

「念々に念仏を唱えていることは、常の懺悔である」(同上)

ある時法然上人は二祖上人の聖光房弁長、熊谷直実の法力房、選択集を筆録した安樂房遵西の三人と法談を交わしていた。遵西が上人に尋ねていうのに、十重禁戒すらも十分に保っていないし、常に妄念を起して心を乱して仏道に精進しているとはいえない者が、念仏を唱えているだけで間違いなく往生できるかどうかということであった。すると上人は答えていった。

「勿論往生できる。つまりは必ず往生できると信じて念仏を唱えている者は往生できる人なのである。煩惱や罪惡等が往生の障りになるのならばぬかは、凡夫の心をもって知ることはできないにしても、念仏往生の本願に相應しただけの念仏を唱えてさえいれば、障りとなって往生を妨げるような罪はないのである。往生は念仏の功德を信じるか、信じないかによってきまるのである。決して罪惡のあ

るなしによるものでない。仏の本願は凡夫の極楽往生を許し給うているのである。何うして妄念のあるなしによって区別されることがあるか」(諸弟子との問答。勅修御伝第二十四)

罪深い者であっても念仏を唱えれば極楽往生できるのは、阿弥陀仏は罪深い者でも嫌い給うことがないからである。五台山で文殊普賢両菩薩の靈告を受けたという法照(八世紀中ごろの人)は次のように説いている。

「阿弥陀仏は法藏菩薩としてご修行するに当り、一切の人々を救うという誓願をたて給うた。そのために名号の功德を聞いて念仏を唱える者があれば、その者の命終の時に必ず迎えて極楽浄土に往生させると誓ひ給うた。その者が貧窮であらうと富貴であらうと区別することなく、愚痴と英才とに関係なく、学問に励んで戒律を保つ者であっても、戒律を破って罪をつくった者であっても、もしその者が往生したいと願って念仏を相続すれば、たとえ瓦礫に等しい凡夫であっても、極楽浄土

に往生してから黄金に比すべき菩薩となることができ」(五会法事讃)

法然上人は罪深い者であっても往生できるのは、仏の教えに人々に利益を与える法力があり、念仏には人々を守護する仏力があるからであるとして、次のようにいった。

「自然界には病氣を癒す薬草があり、鉄を引きつける磁石があるが、何れも不思議な働きをもっている。麝香に芳しい香りがあり、犀の角は水を寄せつけない働きがある。これらは心を持たない草木であり、誓いを起すわけがない動物であっても、もともとこのような不思議な働きがある。まして仏が説き給うた法力に不思議な働きがないわけがない。だから念仏を唱える毎に、その者の八十億劫という長期にわたる罪を滅する力があるわけである。いかに罪深い者であっても、念仏を唱えていれば必ず来迎し給うというのは、阿弥陀仏の仏力である。仏の力を信じて前世の善根のあるなしを問題にせず、己れの罪の深い浅

いを願ふることなく、ただ念仏を唱えてさえいれば、必ず極楽往生できると信じていなくてはならない。阿弥陀仏の本願は破戒の者も持戒の者も、貧窮の者も富裕の者もすべて区別することなく、ただ念仏を唱えていれば往生させると誓ひ給うている」(或人のもとへつかはす御消息。勅修御伝第二十三)

法然上人は外寛内厳の高僧であつたといわれている。恐らくそのためであらうか、自らを十惡の法然房であるとして、次のようにいつていた。

「自分は烏帽子をつけない無位無官の僧である。十惡を犯す法然房、の知恵のない法然房はただ念仏を唱えて、極楽往生したいと願っているだけである」(常に仰られる御詞。勅修御伝第二十二)

上人がこのように常に仰せられていたことを思う度に、厳しい感銘を受けるのである。上人のお言葉は、いうまでもなく十惡を犯してもよいということでない。ところが上人ご

在世の当時に、念仏を唱えている者は心の向くままに罪をつくつてもよいと説く邪義がはびこつていた。色欲や肉食を断つ必要がなく、食べたければ思い通りに鹿や鳥を食べたらよいというのであつた。こうしたことは、上人の一念義停止の起請文に、次のように説いていることで知られる。

「弘法大師は人間の最低の心情を異生羝羊心と名づけ、この者が色欲と食欲を求めるとは牡の羊のようであると説いている。一念義の者たちが官能的な欲望に耽つてゐる様子は、あたかも羊のようであるといえる。異生羝羊心は弘法大師が説いている十住心の最下位の心で、地獄、餓鬼、畜生におちるべき性根なのである。誰れがこの心を憐れまずにいられるであらうか。念仏以外の法門を妨げているばかりでなく、念仏の行すら失つてしまつてゐる」(勅修御伝第二十九)

(つづく)

み仏とともに

=7=

—小僧生活の再出発—



やす い こう さん
安 居 香 山

(大正大学教授・文博)

京都の東山山麓に沿って、疎水といわれる用水川が、南から北に流れている。銀閣寺・法然院・南禅寺などという寺々が、この流れに沿っており、一段と東山の情緒を深めている。哲学の道とされるのも、この疎水に沿っている。かつて西田幾太郎博士たちが散歩した道である。私と父は、この道をあてどなく、疎水に沿って歩いていた。少くも私は、何故この道を歩いているのか、分らなかった。しかし、父はこの辺りに上田純明先生がいることを知っていたのであろう。そして、先生に一縷の望みを托して、その住居を探していたのではなからうか。とも角、その家はみつかった。そこでどのような話があったのか知らないが、父は私を上田先生に托すと、私をふり切るように、田舎に帰ってしまった。

その頃、上田先生は、知恩院の山内にある華頂女学校（今の華頂女子高等学校）の国語の教諭をしておられた。なんでもその学校には、お寺の住職が勤めている方が幾人かおり、その中に小僧さんを欲しがっている人がいるというところで、話をしてみようということになったようだ。上田先生は、実は三ッ谷の常光寺のご養子で、いずれはその寺を継ぐことになっていた方である。いうなれ

ば、私の家の檀那寺のご養子であったわけである。父はそのため、よく知っていて、先生を頼っていったようである。ところが、常光寺に男の子が生れたため、先生はご養子ではあったが、後にその男の方（現常光寺住職、上田純孝師）に寺をゆずり、自分は生涯とも、教師生活で終



— 寿仙院の門 —

られることとなる。

こうしたご縁で私は、上田先生には、その後何かとお世話になった。わが子のように、私のことを心配して頂いたり、喜んで頂いたりした。そして、私が成人してからも、いろいろと助言を頂いたり、仕事を一緒にさせて頂いたりすることになった。全く人生の縁というものは、不思議なものである。

話は少し前後したが、とも角、そんなことで、私は何日間か、先生のお宅でお世話になった。奥様も何かと励ましたり、世話をして下さった。その内、華頂高女の二人の小僧希望者がでてきた。浄土宗と、日蓮宗のお寺の住職であった。どちらかというと、日蓮宗の人の方が積極的であったようであるが、すぐには結論がでない事情があったらしく、取り敢えず、浄土宗のお寺の方でお世話になるということになり、何日間の後、私はその寺に引きとられて行った。その寺が、百万遍山内の寿仙院であった。そして、結局のところ、ここで私の第二の小僧生活が始まることとなったのである。そして、私の人生は、新たな展開を、ここで見ることになった。

寿仙院は、百万遍山内の塔頭^{たつちゆう}で、檀家百軒足らずの小寺であった。そして住職の片岡鱗角師は、華頂女学校の事務所に務めおてられた。或る日片岡師は私に、

「日蓮宗のお寺で、是非おまえを欲しいと言ってきたので、そこへ行かないか」

と聞いた。私は即座に、「いやや」と答えたように覚えている。又、ある時、

「大きな紙問屋で、小僧が欲しい人がいるが、行く気はないか」

とも聞かれたが、これも「いやや」とことわった。

片岡師には実の子がなく、華頂女学校に行っている養女がいた。この人がとてもやさしい人で、何日聞か世話になっている間、とても私を可愛がってくれた。師匠にいわれる度に、私はこの姉さんにしがみついて、

「もう、どこに行くのもいやや」

と、駄々をこねた。姉さんも、

「そんなに言っているんだから、置いてあげたら」

と助言もしてくれた。そんなお蔭もあって、結局私は、この小僧として、置いてもらうこととなった。

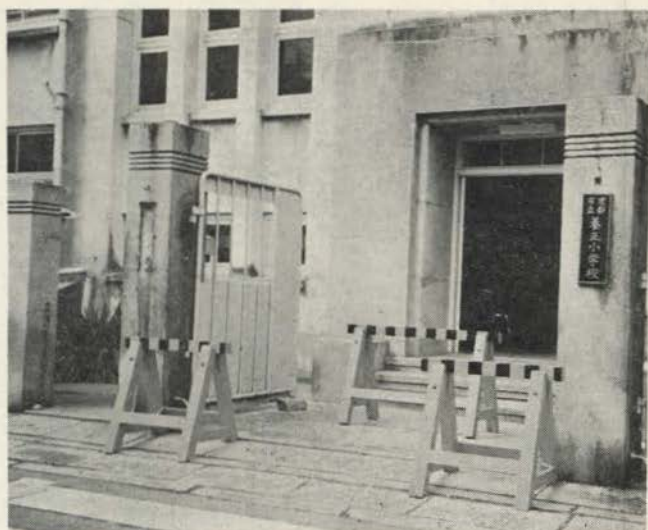
師匠の片岡上人は、評判の温厚篤実な方であった。まだ若いのに、頭はきれいに禿げており、わずかに後頭部に毛がある程度であった。また、後に私がお母さんと呼ぶようになった片岡夫人は、祇園の芸妓あがりで、なかなかの美人であった。この方もやさしい方であったが、厳しい面を持っておられた。そして、この母には、可愛がられもしたが、随分と鍛えられた。

或る日、姉と二人で風呂に入っている時、風呂が大変ぬるかった。その頃、おのぶさんという年輩の女中さんがいたが、二人で風呂の中で、

「気のきかん女中さんだね」

とさんざん悪口を言っていた。それを母さんに聞かれた

らしい。二人は、風呂をあがると、母さんの前に静坐させられて、さんざんに油をしぼられた。



——養正小学校——

「母さんは、からだが弱いから、おのぶさんにきてもらっているのです。おのぶさんは、母さんの身がわりです。そのおのぶさんの悪口をいうとは、何事ですか」

こんな調子で、一晩中、お説教をくった。その後、いろんなことで叱られたことと思うが、余り記憶に残っておらず、この事だけが強く印象づけられているのは、余程ひどく叱られたためではなからうか。

この寺で私は、小学校四年生から、小学校を卒業するまでいることになる。小学校も、寺町の京極小学校から、百万遍の近くにある養正小学校に転校した。そして、朝夕の本堂でのお経も、師匠と共にやるようになり、その内に自分で独りで簡単なお経もできるようにになった。

寺町の阿弥陀寺の時と違い、家族ぐるみの生活の中で、姉さんと姉弟のようになり、楽しい日々を過しながら、小僧生活をした。そして、多分小学校の六年生になったころ、得度式をしてもらい、名を麟教とつけてもらった。片岡麟角上人の弟子ということで、麟教と名づけられたのであった。母さんの名前は、片岡京であった。

「私と同じ音で、よい名前がついた」

と、母さんは喜んでくれた。隣教の教と、母の名前の京とが、同じ音であることを、喜んでくれたのであった。しかしこの名前は、その後の私の生活の変動で、まぼろしの名前となってしまった。その事は、また後にふれることにしたいが、人生の運命というものは、まことにばかり難しいものである。

田舎の父母達は、私が百万遍の寺に落ち着いたことで、一安心した。しかし、いつ何時、又迎えにきてくれるとこないとも限らぬと、始めは大変心配していたらしい。そして、半年近くは、師匠と手紙のやりとりはしてはいたらしいが、顔は見せなかった。

一方、私の方は、あの恐ろしい母の顔は、二度と見たくはないという気持ちがあつて、田舎に帰る気など、さらさらなかった。又、よい姉さんもあることもあつて、楽しい小僧生活に満足していた。そのため、田舎に帰りたいとも思わなかった。

寺の母さんも厳しい人で、

「一人前になるまでは、田舎に帰しませんよ」

と、私にも、私の両親にも強く言い含めていた。従つて、両親の顔をいつ見たか、私ははっきり覚えていない。この寺に入ってから、一年程たつてから、田舎の餅や野菜をもつて、一晩どまりで両親がきたように覚えている。しかし、私はもうすっかり、寺の子になつてしまつていて、それ程、両親を恋しいと思わぬまでになつていた。小学校六年生になり、得度式をすませた年の夏のことであつたと思う。片岡夫妻につれられて、久方振りに私は三ツ谷の故郷の土を踏んだ。姉さんも一緒であつた。私と言へば、白い着物に黒い麻の衣を着せられていた。

「伊三郎さんが、とうとう坊さんになられた」

村の人が珍しげに、私達を迎えてくれた。それは又、村にとって、大変なできごとでもあつた。母さんの演出も、たいしたものであつたが、私の坊さんとしての人生が、こうした形で、村人の祝福を受けて、始まつた。

(つづく)

ナムナム童話 (3)

ナムナムさんのてがみ

ぬ・の・む・ら・て・つ・や

「たっきゅうびんです。」

かよちゃんか げんかんへ出てみると ポ
ールばこのにもつです。

「おかあさーん おもくてもてない。」

もちあげようと思いましたか とても一人で
はもてません。

「どれどれ。」

といいながら おかあさんが出てきました。

「どこから きたのかしら。」

あてながきの下をみていたおかあさんが
うれしそうにいました。

「あら おじいちゃんと おばあちゃんから
だわ。」

おかあさんの声も なつかしそうです。だ
って おじいちゃん おばあちゃんは おか
あさんにとっては おとうさんとおかあさん

なんですもの。

「かよちゃんも行ったことがあるでしょ。いなかのおじいちゃんと おばあちゃんのとこるへ。」

そういうながら おかあさんは ダンボールをなでています。

「かよちゃん この中のものが何だか わかるかしら。あててごらんさい。」

くびをかしげるかよちゃんに おかあさんは りようてのゆびで まるいかたちをつくりました。

「ほら おじいちゃんが 木からとって たべさせてくれたじゃないの。＼かよちゃんの ホッペタのように つやつやしたのが おいしいんだよ」といって。」

「わかった！ リンゴでしょう。」

「そうでした。あたりです。」

おかあさんは 手をたたくと

「さあ かよちゃんも もつのをてつだって ちょうだいね。」

＼よいしょ よいしょ＼といいながら はこをおぶつだんのまえに はこびました。

「いちばんさいしょに ほとけさまへあげるのよ。」

かよちゃんのうちでは いただいたものは まずはじめに ほとけさまにおそなえするのです。

ダンボールのふたをあけながら おかあさんがいいました。

「あら てがみが はいっているわ。」

「なんてかいてあるの よんでみて。」

リンゴの上のてがみをおかあさんがひろげてみると そこには大きな字で

『さいしょにガブリと かじったら

チュウチュウチュウのスウスウ

にかいめ ガリッと かじってみたら
タァーラ タァーラの チョーキチョコキ
さんどめ ザクッと かじったら
スウィッと どこでも とんでいける

ナムナムより。』

「おやおや これはなんのこと。ナムナムつていうのは だれかしら。ほんとに おかしなてがみだわ。いったい だれがかいたのでしょうかね。」

おかあさんも くびをかしげながらいうと
リンゴを ほとけさまに おそなえしました。
「さあ かよちゃんも いただきなさい。リンゴは かわをむかないで そのままたべるのが いちばんおいしいのよ。おかあさんが小さいときは はたけでとったばかりのリンゴを いつもガブリ ガブリとたべたのよ。」
あらってきたリンゴを だいじそうにか

よちゃんにわたすと おかあさんは だいどころへ立っていきました。

「おいしく たべてね」といっているリンゴを りょうででなでながら かよちゃんは さっきのてがみのことを おもいだしていました。

「ナムナムなんていう名前 きいたことないわ。」

それとも おじいちゃんかおばあちゃんが かよちゃんを おもしろがらせようとおもって かいたのでしょうか。いくらかんがえても わかりません。

もう こうなったら てがみのように ガブリとかじってみるしかありません。

でも やっぱりしんばいです。

だって てがみのように ガブリとかじったら――

中から チュウチュウチュウと ネズミの

たいぐんが出てきて スウスウスウとおいかけてきたら どうしましよう。

にかいめ ガリッと かじってみたら——
中から タァーラ タァーラとあぶらをつばいにぬった ハサミのおぼけが出てきて かよちゃんのかみのけを チョーキチョコキと きってしまったら どうしよう。

さんどめ ザクッと かじったら——

スウィッと しらないところへ とんで行ってしまったら どうしましよう。きつとおかあさんだってしんばいをします。

「どうしよう おいしそうなリングゴなのに。」
すると おぶつだんの中から声がして

「だいじょうぶ だいじょうぶ。」
と いったのです。

「あー よかった。」

あんしんしたかよちゃんは おもいきって
「さいしょに ガブリノ！」

リングの中から チュウチュウチュウという音がきこえてきます。それは リングの木が ねっこから水をすっている音なのです。スウスウスウというのは リングのはっぱが お日さまと空気をすっている音です。

「わあー おいしい。」

かよちゃんは おもわずにかいめを

「ガブリノ！」 つづいて

「タァーラ タァーラの チョーキチョコキ」
さてさて こんどの音は なんでしょう。
みなさんには わかりますか。

かよちゃんにも わかりません。それに
ハサミのおぼけも出てきません。

口の中には ゴクンゴクンと つばがでてきます。はやくリングゴを たべたいのです。

「まあ いいわ。たべれば わかる。」

「さんどめ ザクツ」と かじったら——
「スウィッ」と かよちゃんのすがたが き

えてしまったのです。ほんとうに どこかへとんでいってしまったのです。

さあ どこへいってしまったのでしょうか。うちへかえることが できるのでしょうか。

「だいじょうぶ だいじょうぶ。」

おぶつだんの中から 声がしました。

かよちゃん は リンゴの木の下に 立っています。

むこうの木のほうから 音がします。

「タァーラタァーラの チョーキチョコキ」

それは さっき いくらかんがえても わからなかった ことばです。

かよちゃんが そつと あるいて行ってみると—— そこにいるのは おじいちゃんとおばあちゃんではありませんか。

「かよこヨ！」

といって かけようとしたのですが おじいちゃんたちが あまりいっしょうけんめいに しごとをしているので 立ちどまりました。

よく見ると おじいちゃんも おばあちゃんも あせをタラタラながしながら チョッキンチョコッキンと リンゴの木の手にれをしているのです。

「おいしいリンゴが できるよう

チュウチュウチュウの スウスウスウ

大きいリンゴに なるように

タァーラ タァーラの チョーキチョコキ」

おじいちゃんと おばあちゃんが話をして います。

「かよこは わしたちのリンゴを たべてくれているかな。」

「きつと いまごろガブリガブリと かじっているにちがいないわ。おいしければ いい

んだけれど。」

「とっても おいしい！」

かよちゃんが 大きな声でいいました。

います。

「おかあさん おかあさん わかったわよ。
ナムナムっていうのが だれだか わかった
のよ。おいしいリングをつくってくれる ナ
ムナムさんが わかった。」

(おわり)

かじりかけのリングをかかえた かよちゃ
んが だいどころへ かけこみながらいつて

昭和六十一年度版

『浄 土 宝 暦』

—三上人遠忌慶讃記念—

B 6 判 四〇ページ

価 格 六五円 (二〇〇部以上特価六〇円)

送料実費 (二〇〇部以上は無料サービス)

◎ 予約発売——ふるってお申込みを!!

法然上人讃仰会

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記（六）

— 敦煌（その三） —



木の
下
隆
一

（隨筆家）

莫高窟の前の緑地帯は、明らかに防風防砂の目的で造られた人工の林である。以前から幾らか樹木は生えていたのであるが、敦煌文物研究所が開かれて約四十年、所員やその家族のたゆまぬ努力によって造成されてきたもので、いまでもその努力は続けられており、苗木畠があちこちに見られる。次代の林の予備軍である。道路との境界に植えられている杉に似た針葉樹の並木の下には、実生の苗も育っている。この針葉樹に雀が群がって、喧しく啼きながら実を啄んでいる。姿も大きさも日本の雀と全く変わりが無いのに、どこか違って見えるのは全体に色が薄いからであるうか。雀もいつの間にかすっかり沙漠の砂に同化してしまったらしい。実生の苗は雀たちが食べこぼした種から芽生えたも

のかも知れない。

林の幅は大泉河の岸までだから、せいぜい二百メートルくらいのものであろう。そんな林に迷い込むと、古い土のお堂があったりする。荒れていて、なにが祀られていたのか判らないが、風雪に耐えたさまは気品すら感じられて、なかなかいい。お堂を二巡三巡してまたフラフラと歩を運ぶ。林間に畠があり、葉菜、根菜、玉蜀黍等、いろいろな野菜が作られている。研究所員たちの自給自足の姿が



——莫高窟入口の二層の楼門——

うかがえる。花壇というほどのものではないが、コスモスが咲き乱れている一画もある。草丈も花も日本で見えるものよりは大きくて、色彩も一段と鮮明である。メキシコ原産のこの草が、いかなるルートを迎ってここまでやって来たのであろうか。敦煌原産のコスモスといった感じで花開いているのが面白い。畠の縁の遊歩道をアーチ型の葡萄棚が覆っている。収穫の後らしく、採り残された貧弱な房がところどころに見られるだけである。デラウエアのような薄紫のもの、マスカット系の緑色のものの、濃い紫色のものと、何種類かの

葡萄が植えられているようである。「採るな、違反者は罰金〇〇」と書かれた短冊がひらひら風に舞っている。観光客に対する警告であろう。どこかで水の流れる音がしている。音を辿って行くと、大泉河の岸に近いところに一跨ぎほどの溝が掘られていて、割合豊かな量の水が流れていた。黄濁しているが、黄河の水のような粘り気は感じられない。どこから流れて来て、どこへ消えてしまうのであろうか。この流れに沿って下って行くと、二層の楼門の前の広場に出た。楼門の両脇に、飛天の白い大きな塑像が置かれている。俗っぽくて、その時はカメラを向ける気も起こらなかったが、いまになって、撮っておけばよかったかなと多少後悔しないでもない。

楼門の表と裏に、それぞれ扁額が掛けられているのも珍しい。いずれも郭沫若氏の筆になるといふこれらの額、莫高窟へ向かう方には「莫高窟」と書かれた縦型のものと、その下に「石室宝藏」と左から右に書かれた横型のものが掛けられており、門を潜ると、そこには「三危攬勝」の模型の額が掲げられている。三危山の景勝を見ろという意味であろうか。とすれば、文字通り楼門を額縁にして、その中に三危山の山容が小さく嵌め込まれている。額の文字が左から右に書かれているところから見ても、この楼門はそんなに古いものではなく、恐らく解放後に建てられたものと思われるが、そうだとすればまだ四十年に満たないのに、いかにも年代物に見えるのは、厳しい気候が古色蒼然たる姿に変えてしまったのであろう。この楼門が復原されたものかどうかは定かではない。私の手持ちの資料には、この楼門のことは何一書かれていない。

この広場にも、敦煌文物研究所の前の広場にも乗って来たバスは見当らなかった。仕方なく、橋を渡って対岸のゴビに上って見る。広漠たる砂礫の原が、大きく波打って三危山の麓まで続いている。ここを上るには、五、六メートルの崖を登らなければならないが、私のような物好きがかなりいるとみえて、踏み固められていた道が出来ていた。

砂礫の上に腰を下ろすと、砂礫が放射する熱気がじんわりと体を包むが、空気が乾いているせいで、それほど暑さは感じない。様々な色や形をした小石が辺りを埋め尽くしているが、大きくても拳大で、どれも丸味を帯びている。気が遠くなるような長い時間をかけて、石たちは互いに研磨しあつてこのような形になったに違いない。白玉の欠片かけでもないかと、思わず白い石を何箇所か手にしてみたりしたが、ばかばかしくなつてやめてしまった。大海に落とした針を拾うようなものだと思つたからである。

見上げると、あくまでも青い秋の空である。日本では滅多にお目にかかれない、抜けるような青さである。碧落というのはこういう空をいうのであらう。刷毛で刷いたような巻雲がゆっくり流れている。雨を誘う雲だけに、二、三日後の天気がいささか気になる。

歩いて二、三分のところに、M君言うところのゴビ饅頭があつた。造られてまだ間がないらしく、華やかな造花が飾られている。その規模や構造を確かめたかったが、死者を冒瀆するような気がして、とうとう踏切ふみきりれないままにゴビを下りた。しかしその時、こういう葬り方をされるのも悪くないな、と私は思った。なにしろこういう土地柄だから、縁者も足繁く墓参に来ることはあるまい。そして、いつか墓の位置も判らなくなり、死者のことも忘れ去つてしまふだろう。死者にとってはその方がさばさばして気が楽というものだ。白骨と化すかミイラとなるかは知る由もないが、やがてはゴビに呑み込まれて跡形無くなつてしまふのだ。それで永遠に安らかな眠りにつける——ふと、そんな思ひが胸をよぎつたのである。

三度、大泉河を渡る。橋のたもとメロンの山は低くなつた気配はなく、土堤に繋がれた驢馬は草を食むのに余念がないし、ブルドーザーは相変わらず賽の河原の石積みに似た作業を繰り返している。まさに世は事も無しであるが、一つだけ変化が見られたのは、河床の砂を黒く濡らして、そこか

しこに水がにじみ出ていることであつた。この河は大泉という泉から発しているものでこの名があると聞いているが、大泉にしても月牙泉にしても、祁連山脈の雪融け水が伏流して池表に現れたところをそう呼んでいるのであつて、そんな水とは比べ物にならない量の伏流水が地下を流れているものと思われる。でなければ、オアシスを形成するのは不可能である。恐らく、この辺りも含めて、敦煌周辺はかつては一大森林地帯ではなかつたか。シルクロードの拠点として敦煌が殷賑を極めたのも、そこに生活する人間が使用する燃料を供給出来る森林があつたからこそではなかつただろうか。需要が供給を上廻つた時、沙漠はひたひたと伐採された森林地帯を蚕食し、やがて古き敦煌は砂の下に没した。こういう事例は現代でも中近東の各地で多く見られるから、あなたがち私の妄想とはいひ切れないと思うのだが。

ふらつく足を踏みしめて、ようやく文物研究所の前でバスを見つけた時はさすがにホッとしたが、一行の姿はなかつた。暇つぶしに研究所に付属する売店に入ってみる。たいして期待はしていなかつたが、三羽の兎が円を描いて右廻りに跳んでいる図柄・緞通のタペストリー（掛壁け）が目にとまつた。よく見ると、耳が三本しかないのに、互いに他を補つて、それぞれ二本の耳をふりたてているかのようにデザインされている。一も二もなく早速買い求める。斬新なデザインが気に入つたのと、一枚しかなかつたのが一層私の氣をよくさせたのであつた。

店を出ると、丁度皆さんが帰つて来られたところで、「三危攬勝」の額を見上げて、M君が佐藤博士に質問していた。

「先生、この三危ってなんですか？」

「そりゃあ君、酒・女・金だよ」

と即座に言つて、博士はニヤリとされた。先生もお人が悪い、と私は思ったが、三峯峻絶、墮^おちん

とするが如く、よって三危の名あり、などというまともな説明よりも、博士のお言葉の方が含蓄があって、説得力があった。

昼前、賓館に戻る。午後は失礼して専ら休養に当てる。賓館の売店で求めた「敦煌飛天」という写真集を眺めて過ごす。この本、ずしりと重いので、これからの道中を思つて買おうか買うまいかと逡巡したが、中味の魅力には勝てなかった。

その中、第四の七窟の「三兔藻井飛天」の写真を見て、私は仰天してしまった。さっき買ったタペストリーそっくりの図柄が天井に描かれていたのである。斬新なデザインでもなんでもなかった。元祖はすでに隋代に描かれていた。但し、藻井（模様を美しく描いた天井）に描かれている兎たちは左廻りであった。タペストリーは、伊豆の家の玄関に掛けてあるが、いまだにこのデザインの妙に気づいた人はいない。いい買物をしたと私は思っている。

一体俺は敦煌へなにをしに来たのだろう、石窟の一つも覗かないで、その辺をウロウロしただけじゃないか——それでいいんだ、いいんだ、人様が見なかったところを俺は見えたんだから……。言い訳みたいな自問自答をしているうちに、いつか眠りに落ちていた。

「明日は汽車でなく、バスに乗って酒泉へ行くそうですよ。かえってバスの方が楽かも知れませんなあ」

藤原さんの声で目が覚めた時は、気分は大分すっきりしていた。すると現金なもので、急に空腹を覚えたのであった。

(ぐぐぐ)

立ち止まるな善導

<16>

寺内大吉

挿絵・松満達文

英才の秘密



朝が未だ明け切らない払曉、一頭の豚が実際寺の庭先へはいってきた。豚とは言っても四つ足ではなかった。二本足で立って歩き、うなり声に似てはいたが、ちゃんとした人間

の言葉を操った。あの肉屋の主人「京」であつた。

この刻限、善導は著作に没頭する日課となつてゐる。いまは観無量寿經の解説、後世「観經疏」と呼ばれた大著と苦闘中であつた。

夜の闇をつき抜けた明窓の光りこそ筆を握る指先を、さらには眠りから醒めきれない大



脳皮を、まばゆく照らし出してくれる。心身が充実した最も貴重な時間なのである。

「花和尚、起きてるか。柿だぞ」

肉屋の「京」は、たちまちぶちこわしにかかった。お引きずり夫人に自分を売りこんだ巨根の陰語「花和尚」を、いつのまにか善導への愛称にすり替えている。

「柿をどうする？」

「今朝は、いつもの倍は売れるぞ」

「なぜ？」

「人出がある。西京の市は群集であふれる」

「祭りでもあるのか」

「……まあ祭りみたいなものだな」

なぜか「京」は人出の理由をぼかした。

善導の日課では弘暁の二時間ほどを著作に没頭し、それから渋柿の仕事にかかる。順次仕込んだ分から選びだして、今朝の一籠をかついで西京の市へ出かけてゆく。

肉屋の「京」はその仕込んだ樽から無差別に渋柿を掴み出そうとする。

「おい、そつちの分は未だ早いんだ」

「少々渋くたって構うものか」

善導の制止に耳もかさず、持参した大籠二つへ投げこんでゆく。

「花和尚、今朝はわしも柿売りになるからな」

「肉は売らんのか」

「今朝ばかりは売れそうにない」

「どうして？」

「……」

相変らず「京」は答えようとはしなかった。

やがて實際寺の楼門を奇妙な組み合わせの二人づれが出ていった。お互いに大籠と、やや小ぶりの籠を背おい、もう一つの大籠には棍棒を差しとおして、左右からこれを抱える。どの籠も柿で一杯だった。

「京」が言ったとおり長安西の市場には群集がひしめいていた。いつもの朝市と異なるのは、この群集が日用品や食糧店の前には

「京」は肉屋の店を開けようとはせず、實際寺からかついできた渋柿を広場の路上へ並べ大声を張りあげて売りさばくのである。それも三個で紙一枚などという奉仕値段ではなかった。柿一個に法外な値をつけて銭をかき集める。

「それは無法だ」

とたしなめる善導を逆におどしつけた。

「これが商機というものだ。花和尚よ、今朝だけはわしの思うがままにさせよ。商売の邪魔をするな」

まるで善導は「京」の小僧もどきになって、命ぜられるままに籠から忙しく柿を掴み出しては「京」に手渡さなければならなかった。

「来た、来たぞ」

群集の間でざわめきが立った。一台の大事を囲こんだ軍兵の列が広場へ到着した。車上にはがんじがらめに縛られた四人の男が坐っている。

「斉の反乱將軍たちだ」

「京」はささやいた。吏生王徐明から経緯の一端を聞いていた善導はようやく納得する。

すでにこの貞観十七年（六四三）の三月、皇太子の恒山王と気脈を通じていた太宗第五王子の祐は齊州城（山東省）で公然と反旗をひるがえた。だが内偵を進めていた太宗はためらうことなく討伐軍を送りこんだ。国賊となつた齊州城の防衛軍はたちまち四散し、齊王祐は逮捕されてしまった。彼は長安へ引かれて死を賜わり自決した。

齊王祐の陰謀に加担、ないしは煽動したと断ぜられた侯君集、趙節、杜荷、李安儼らの將軍は、いま西市場の広場で極刑に処せられようとしている。

群衆はやたらと昂奮する。処刑と聞けばその理非曲直は問題にならないのである。

善導にはこの昂奮ぶりが悲しい。人間にはみな仏性がある、と説く。だが処刑を單純に

正義の行為ときめこんで、いやその権力者がこしらえた法則を楯にして生き血を求める残忍さのどこに仏性が有るのだろうか。かりに有ったとしても、それをさえぎって包み隠くす煩惱の脂肪は容易に拭ぐい取ることではない。

車上から引きずりおろされた四人の敗軍の將たちは、広場中央の柳の樹下へ並んで坐らされた。取り囲こむ首斬り役人たち。

突然、侯君集が叫びだした。

「ああ、陛下よ。許して下さい。この私の一命ではありません。以前の戦功に免じてわが子の命だけはお助け下さい。」

戦功とはトルファン(高昌)を攻略し、唐王朝の治下へ吸収し、二十四功臣に選ばれたことを言う。その子とは、当然いま獄中にある女驛の賀蘭楚石を指している。母の賀蘭をもふくめた三階教団のこの事件における失態は無尽蔵院がかき集めた金銭の大半を吐き出すことで解決したようである。罪は斐玄智ひと

りの背へかぶされた。唐政府も現金を必要とした。

ところで太宗は十七年前の貞観元年、側近にこんな戒しめを与えたことが「貞観政要」にある。

——死する者は再び生かすべからず。法を用うることを、務めて寛簡に在り。古人云わく「棺をひさぐ者、歳の疫あらんことを欲す。人を憎むにあらず。棺の售(う)るるに利するが故なるのみ」と。今、法司、一獄を窮理するには必ず深刻を求め、その考課をなさんと欲す。今、なんの法をなさば平允ならしむるを得ん。(中略)「……今より以後、大辟の罪は、みな中書、門下の四品以上及び尚書、九卿をしてこれを議せしめん。この如くならば、こいねがわくは冤濫をまぬかれん」これによりて、四年に至りて死刑を断すること、天下に二十九人、ほとんど刑おくを致す。

なく、高い柳が一本そびえる四辻の広場を取り巻いていることだった。

大意はこうだ。

一度死刑に処した者は二度と生きかえらない。だから法の適用はつとめてゆるやかにせよ。古人は言う。棺桶を売る者は、疫病が流行することを望んでいる。人間を憎むからではない。棺桶が沢山売れるのを願っている。

いまの法務官もこれと同じで、苛酷な取調べをおこない、自己の成績を上げることばかりを考える。どんな方法を採用したら公平な裁判が出来るのだろうか(中略)「これからは死刑に値する罪には必ず中書、門下両省の四品以上の高等官、及び六部の長官ならびに九卿の合議によって決定することにした。こうすれば無実の罪もあとを断つであろう」かくて四年がすぎたが、死刑に処された者はわずかに二十九人、刑の執行は殆んどなくなっている。

太宗は、こんどの処刑も執行するにしのび

なかったであろう。刑場へ送りこむ前、太宗は獄に侯君集を訪ねて、永遠の別離を涙にむせびながら悲しんでいる。

しかし名君太宗による仁愛と理政の「貞観の治」も、この骨肉造反、酸鼻な処刑がきっかけとなって暗黒支配へ傾斜していったのも事実である。

二

四人の処刑は酸鼻な経過をたどって実施された。それが、あらかじめ立てられたのか、たまたまそうなったのかはわからない。

首斬り役人たちが青竜刀をかざし、その刀身が折からの黄ばんだ朝の陽光に鈍く光り、ふりおろされた一瞬鋭い白光を放ったところまでは「断罪」の爽かさがあった。

ところが四人の刑吏、そろって太刀の使い方がぶざまであった。罪人の首が落ちないの

である。首筋から血を噴出させ、突っ伏したまま悶え苦しんでいる。刑吏はあわてて二の太刀、三の太刀を振りおろすが、これがマトを外ずれ、受刑者の苦悶はさらに増すばかりだった。

このなぶり殺しに似た残忍ぶりに広場の群衆は敏感に反応した。これまでの「正義」を謳歌する喚声や鯨波は消え、誰もが表情を暗く閉ざして刑場から眼をそむけた。そして、群衆の一隅から莊重にして、哀切な合唱がおこった。歌詞もないメロディだけの唸り声である。

これは「薤露(かいろう)の章」と呼ばれる葬送歌である。貞観二年に唐政府が制定した唐雅楽の一端で、もっぱら鉦、鼓、琵琶などで演奏される音曲だった。そのメロディを広場の群衆たちはいっせいに口ずさんだのである。巨獣の咆哮に似て、この葬送歌は処刑場を押し包んでしまった。

法の正義にもとずく死罪の執行を支持した

大衆が、その酸鼻な「殺しの手口」を目撃して突如人間の死を実感したのだ。柳樹の下に突っ伏して斬りきざまれる囚人に、おのれの姿をうつし見てしまったのである。

中国の古来からの死生観は、「礼記」にあるように、「魂氣は天に帰し、形魄は地に帰す」という思惟で固成されている。絶命するとともに魂氣(霊)は肉体から游離して昇天し、肉体は大地へ帰るのである。

処刑される者が、すすんで足もとの土を掘って墓穴をつくるのもこの思惟から由来する。当然、昇天した魂氣は不死である。永遠に生きながらえる。

だが今、一刀両断にされそくなって、斬りさいなまれてのたうちまわる処刑者の姿は、伝統の哲学と美意識を甚だしく傷つけた。一隅から発した「薤露の章」の合唱は広場いっぱいにはびこった。もはや罪人の処刑とはいえない。あわれむべき同胞の葬送となった。



処
刑



善導は、この歌声の調べに乗せて、胸底からこみあげる詩句をつぶやいていた。こつぜんと湧いた詩句であった。

——終時苦相 如雲集

地獄猛火 罪人前

忽遇往生 善知識

急勸専称 彼仏名

化仏菩薩 尋声到

一念傾心 入宝蓮

三華障重 開多劫

干時始 發菩提因

願共諸衆生 往生安樂國

臨終の苦しみは、さぞや雲の如く厚く暗いことであろう。地獄の前に重罪人が立ったとき、たちまち善知識があらわれて、阿弥陀仏の御名をとえなさい、と勧めてくれる。諸仏も諸菩薩もその声を聞いて尋ねきて、蓮台へ導き入れるべく手を貸して下さる。しか

し、なお三華の障りは重く、蓮台の花びらは容易に開いてはくれない。かくてようやく時機来たり、菩提心はみのつて安樂國へ見事に再生する。さあ、多くの衆生とそろってこの安樂國へ往生する道を歩きすもうではないか。

これは後に善導自身がまとめあげた「六時礼讃」日中の一端にすぎない。

重罪人の処刑を眼前にして、それも臨終の苦しみにのたうちまわる姿が、阿弥陀仏の救いの手を現実のものとして希求したはずである。大衆がハミングする哀しみのメロディにつれて思わず詩句が洩れ出たのである。

「あの青竜刀は、刃こぼしがしてある」

突然、善導の背後で若い声がした。ふり向くと黒衣の僧だ。善導より年下かもしれない。

周囲は肉屋の「京」を取りまいていた連中だ。自分に話しかけた、と思わねばなるまい。

「刃こぼしがあるとは？」

「わざと苦しめるためだ」

「なぜだろう」

いかにも確信ありげに語る美目秀麗な青年僧を、善導はいぶかしげに見つめた。

「侯君集、あの人への嫉妬からだ」

「四人のうち、その人だけをことに憎んだのは？」

「凌雲閣にかざった壁画のためだ」

この僧、おそろしく唐政庁の深部に精通している。彼が語るところによると、この貞観十七年の正月十七日、功臣の魏徴が六十四歳で他界した。

魏徴ははじめ太宗の兄建成に仕えていたが、皇太子だった実兄を除こうとする太宗の「玄武門クーデター」で逮捕された。処刑直前の訊問で魏徴は堂々と「皇太子が私の直諫に耳を傾けていたら、こんな政変はおこらなかった」と太宗に答えたことで、死一等を減ぜられたばかりか、以後側近において重用さ

れた。魏徴もこの愛顧に甘んじ眉びることなく太宗にすばり苦言を呈し続けた。

太宗は魏徴の死を記念して、唐王朝創業の功臣二十四名をえらんで天才画家の閻立本に肖像を描かせた。凌雲閣のかざりかたは、天子太宗が北壁に、功臣たちの画像は南壁に並べられた。いわゆる臣下が北面する礼を守ったわけで、日本でも宮廷の武士を「北面の武士」と呼んだ典故になる。

若い僧によれば、この二十四功臣像に大逆の徒侯君集の顔が混じっている。あっさり死なせてなるものか、という陰謀である。

「処刑される者、処刑する者、いずれも罪は深い。その罪の深さを仏によって救って頂く。救いの道をきわめ、ひろめるのが私たち僧の務めではないだろうか」

善導はもの静かに有めるように言った。「そうであろうか。それだけで済まされるのであろうか。やはり正邪のけじめは明白にすることも僧の務めだ、と私は思う」

若い僧は氣おい立っていた。

「もちろん現世の善悪を見きわめることも大切だ。それを放棄して、運命と諦らめてしまふ態度も仏の像をぼやかしてしまふ。だが、正邪を現世の鏡で無理に映し出そうとする行為もそれにまさるとも劣らない悪徳となる。仏に仕える身としては……」

「貴僧はお見かけしたところ、未だそれほどのお歳とも思えない。私より三つ四つ上かな。その若さで、よく老成したような考えで満足しておれる」

皮肉な笑みをふくんで善導を見おろしてくる。しかし善導は激することはなかった。前と変らぬもの静かな口調で、

「仏の世界に老いも若さもないであろう。救われるかどうか。人生の途上で、その一点だけを見つめて精進することだ」

「一点を見つめきることか……ところで今、貴僧は何やら歌を口ずさんでいたな。他人の死を目撃して歌うとは、どういうことである

か」

「此処にいる殆んど人間が歌っていた。なぜか。余りにもむごたらしい死を見せつけられて、彼らは歌うしか感情を表現できなかったのだ。わたしもこの歌声は貴いものだと思った」

「悟りとは、ほど遠い所業だな」

「凡愚の大家にはあれしかない。いや、わたし自身もその愚衆の一人なのだ」

「いづれゆっくりお会いしたい。私は大総持寺にいる弁機という者」

「實際寺の善導。大総持寺と言えば道岳法師がおられた寺だ」

「ご存じか。すでに遷化されたが私は法師から最後に教えを受けた者。いや立派な唯識学究であった」

すでに処刑は完了し、血にまみれた屍体は大車に引きあげられ、いずこかへ運び去られた。広場の群衆も散ってゆき、若い僧弁機の姿もその波に吞まれて消えた。

この貞観十七年からわずか五年後、弁機自身が同じ広場に引ッ立てられようとは誰が予測し得たであろうか。

ついでのことながら大逆事件のあと始末だが、皇太子だった恒山王李承乾は庶人に降格されて四川省の彭水県へ流刑になった。翌々年の十二月、配流地で死んだ。二十五歳であった。またこの兄と皇太子位を争った魏王李泰も湖北省へ封じこめられた。そして、皇位とは全く無縁と自他ともに信じた第九子の李治が皇太子にえらばれた。文徳皇后の胤というだけの理由だった。太宗を継いだ高宗である。

三

その日、善導は大総持寺に弁機を訪ねた。自分とは志向するものにズレがあるが、あの才気煥発、傲慢とも思える気迫の鋭さには魅

力があつた。善導は弁機のすべてが知りたくなつた。

長安城の西南隅、平陽坊に大総持寺はあつた。だが弁機は不在だった。寺の者に聞いた。だと、最近は何んと大総持寺を離れ、城外に草庵を結んで独居しているという。その草庵まで足を伸ばした。

草庵と呼ぶにはおよそかけ離れている。木の香も新しい豪華な構えの邸宅だった。案内を請うと、召使の老婆が現れた。僧の住む草庵にこんな召使はおよそ不似合いである。

弁機の書斎は三方の壁にうす高く書写した經典類が積み上げてある。

「よく来てくれた。あれから貴僧のことをあちこちにたずねまわってみた。長安きつての西方学者だそうな」

言葉は相変らず傲慢無礼だが、善導へ関心があるいは好意に近いものを寄せているのは事実だった。

「おぬしのことを調べようと思つたが、誰も

教えてくれなかった」

「そうであろう。そこらの山僧や乞食坊主ではこの弁機のことを知るわけにはいかない」

「この家は誰のものかな」

「私の草庵だ」

「草庵にしては立派すぎる」

この僧としゃべっていると、善導もつい口調がぞんざいになる。弁機が身に付けている野性味のせいかもしれない。

だが弁機は、野性味と同質同量の教養もたくわえていた。ことに語学の造詣の深さは善導の舌を巻かせた。クチャ、ウイグル、ソグド語からサンスクリットにまで通曉しているのである。この若さで、いつどこで学んだのだろうか。それをただすと弁機は屈託なく笑った。

「言葉なぞ一つ学び取ればあとは安々と理解できるようになる。どうせ人間がしゃべったり書いたりする言葉だ。どこかで共通しているところがある」

「これはおぬしが訳したのか」

「そうだ。亀茲人が持っていた羊皮紙をもらった。訳してみたわけだが、どうもこれは偽経らしいな。仏法とちよつとズレたところがある」

亀茲人のクチャ語を翻訳したものが、善導はその流麗な漢語にも一驚した。堂々たる詩文なのである。

大総持寺弁機の英才博学ぶりは、すぐこの翌年に花ひらいた。玄奘三蔵が長い西域、インドの旅から帰朝したのだ。玄奘が持ち帰った経典類はただちに翻訳されることになった。「綴文(てつぶん)大徳九人」と呼ばれたエリート学僧が訳経の仕事に選ばれた。弁機も道宣らとともに指名を受けた。彼は「瑜伽師地論」百巻のうち三十巻を完訳したばかりでなく、玄奘の旅行記を「大唐西域記」にまとめあげた。これは玄奘の「志記」にもとずいて弁機が麗筆をふるって完成させた「方志」として世界的名著となった。

——ここに庸才に命じ、この方志を撰せしむ。学は博古にあらず、文は麗藻なし。鈍を磨き朽を励まし、疲を力め養を曳き、うやうやしく志記を承け、その文を論次す。尚書筆札を給して撰録せしむ。

見事な弁機自身の序文が錦上に花を添えている。

玄奘の帰朝、その訳経場として長安に太慈恩寺が建立されたのは貞観二十二年である。母文德皇后の冥福を祈って高宗皇帝の手に成った。善導がこの大慈恩寺にいたという明文は残っていないが、碑文目録にその記載がある。

永隆二年（六八二）の年号入りで僧義成が撰し、李振方が正書したものにはっきりと、

——唐慈恩寺善導禪師塔碑

とある。同類のものは宋代、大中五年（八五一）僧志遇撰並書にもある。

貞観十七年の四月に戻る。

弁機の書斎で歓談を尽し、時間の過ぎるのも忘れた善導は、弁機が燈芯をともしようとするので、あわてて席を立った。弁機も強いて制止しようとはしなかった。

草庵は深い竹藪のかげに建っていた。善導はいっそう暗さをました竹藪を抜けていった。出切ったところに田園がひろがり、遠く長安城の灯が臨めた。

善導は思わず足をとめた。今しもその長安城の方からやってきたと思われる小轎車（こうしぐるま）が竹藪の入口に停まったのである。簾をあげて降り立ったのは夜目にも鮮かな紅色の霧離（へきり）を羽おった女性が単身で奥へ消え去った。

藪の奥には弁機の草庵しかない。となると、あの貴婦人はこの夜陰に弁機を訪ねるのであろうか。

妖妬や羨望の濁った感情は微塵もなかった。危惧だけである。先日來、善導の胸に兆した弁機への友情が、この才氣渾発な若者の身辺を危ぶみなかった。もちろん深く詮索する意志もない。善導は見届けただけで長安城内への帰途を急いだ。

この小轎車から降り立った小柄な婦人こそ問題の人だったのである。太宗皇帝の第十七王女、高陽公主であった。しかも彼女は独身ではない。名臣房玄齡の二男遺愛へ降嫁した人妻であった。

だが弁機と高陽公主との関係は昨日や今日のことではなかった。彼女が十六歳、弁機二十一歳の春に結ばれている。王女と僧といひなさぬ仲がこの恋をみのらせず、王女が嫁入ったあとも途切れずに継続したということだった。

それにしてもあれほどの才人弁機が、人並みはずれた冷嘲な頭腦の持主だったはずなのに、なぜこんな不倫な関係の感溺から脱出で

きなかったのであろうか。まさに男女の不可思議な結び付きと言わなければならないであろう。

友情が兆しかけた善導だったが、そんな秘密を垣間見たこともあって、以後二度と弁機の草庵を訪ねなくなった。情事の真偽をたえず意図はさらさらなく、先方からすり寄ってくるのなら別として、強い縁を深めるつもりは善導になかった。

——眼をあげて女人を見ず。

西京随一の美僧とうたわれた善導だったが、最も苦が手なのがこの異性問題なのであった。

(つづく)

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）
（とめ下さい。）
- 一、枚数 四百字用紙五〜八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十一巻 十月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和六十年九月二十五日 印刷
昭和六十年十月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六
発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒〇三 振替東京八一八二一八七番

現代仏教情報大事典

現代仏教情報研究会編

仏教界の「現在」が見えてくる情報源!!

【内容】①寺院に関する情報 ↓ 各宗派の本山、有名寺院、海外の開教寺院・名所仏蹟など ②組織に…… ↓ 各宗務庁、都道府県仏教会、学会、宗立学校、仏教青年会、宗教法人事務主管部局、世界仏教徒連盟など ③行事・儀式に…… ↓ 主な本山・有名寺院の行事、冠婚葬祭、④仏教常識に…… ↓ 知っておきたい仏教知識・仏教用語など ⑤寺院経営に…… ↓ 税務対策、多角化、法律問題など ⑥布教に…… ↓ 放送、テレホン相談など ⑦仏教関係業界に…… ↓ マスコミ、葬儀、墓地・霊園、仏具、石材、門前町、精進料理、⑧人物に…… ↓ 現代人物名鑑（僧侶・学者・文化人等約300人）、物故者、



【定価二三、〇〇〇円】特別定価一九、〇〇〇円

(昭和61年3月末迄)

絶賛発売中!!

大日本仏教全書

仏書刊行会編 全一六一巻

(※浄土部Ⅱ巻53Ⅰ巻63)

ご希望の巻を分売致します。
分売一冊単価一、〇〇〇円

織田得能著 仏教大辞典

定評ある内容の正確さと、
語彙の豊富さ。豪華机上版。
B5判・定価一六、〇〇〇円

仏像仏典解説事典

三井晶史編 (昭和新纂国訳
大蔵経解説部一・二巻合本)
代表的な仏像一八点・仏
典五三六点を収録。索引付。
四六判・定価二一、〇〇〇円

梵字大鑑

種智院大学密教学会編
わが国唯一の梵字一大集成
B5判・定価二五、〇〇〇円

- 内容見本無料贈呈・電話またはハガキ(JD係)でお申し込み下さい
- ご注文・お問い合わせも直接当会へ
- 全国無料配達・代金後払い

☎03(724)8031

名著普及会

〒152 東京都目黒区平町1-16-6